



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成15年
5月号

毎月23日発行
通巻393号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成15年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



岩木山遠望 青森県弘前市 石田勝利さん撮影 (文・7頁)

第14回大倭会文化講演会

日本人の努力のかたち (第2回)

於 大倭紫陽花邑拝殿 平成14(2002)年11月10日

講師 鶴見俊輔氏

持続力のある運動

銅貨の裏から見ると、一年の時からずうとこうやって上がっていく教育制度が裏になっているわけ。一番で来る人は、一年生と二年生と先生が代わる時があるでしょ、小学校と中学校でまた先生が代わるでしょ、中学校と高等学校でまた代わるでしょ、大学でまた変わるでしょ、常に先生がそこにいると、その胸中にある正しい答えが、ピンとその鋭い学習の直感でわかるんですよ。先生は自分に何を言ってほしいのか。そしたら、そういうふうにして東大一番で出たとしても、その前に絶えざる十八年間の転向の体験をもって、「体操」をやってきているわけだ。

だから、大正時代だって、美濃部憲法の解釈で高等文官試験通ったとしても、ドイツでナチスが優勢になってきたらナチスの法学、その時はもうカール・シュミットの法学。そして、美濃部さんの具合が悪い、国体に反するってことになったら、美濃部さん引つ張ってきて牢屋に入れて、その尋問を美濃部憲法やって高等文官試験通った人がやるんです。美濃部さん、相当まいったらしいんだよね。自伝に書いているけれども、嫌な時代になったなあ。そしたら、昔の恩師ですから、尋問が終わった後にうな井を取ってくれたんだ。「うな井とってもらって、うな井食べた時はホッとした」って美濃部さん自伝に書いている。

私とその美濃部さんの自伝の要約をや

って本を作ったんだけれども、『日本の百年』（筑摩書房）という十巻本の本なんです。偶然、私と組んだ相棒が東大出なんだよ。出たばかりなんだ。私がせっかくそのうな井のところをちゃんと残して要約を作った時、うな井のところを消しちゃったんだよ。つまり、美濃部憲法いかなるものか、そういうところが重大だと思っちゃうんだよね、東大出って。私は、「あなたは東大出てますね」って言ったんだよ。私が「うな井のところを消したんでしょ」って言った。彼は悟るところがあつて、大変良い男で、悟ったんだ。うな井のところを生かした。今も、『日本の百年』にはうな井のところが入っていますよ（笑）。

だけど、うな井が出てくるところが、恩師に対するわずかな武士の情けなんだよね。繰り返しの転向、これは日本の官僚の制度に染まっているんですよ。今起こっているでしょ。戦争に負けて、平和憲法万歳。こいつをまたひっくり返す。平気でやるんです。つまり、教育制度がそうなんだから。だから、戦争中は国民国家万歳、戦争に負ければまた平和憲法万歳で、今度はまたアメリカの後について普通の国。そういう構造になっちゃっているんですよ。学校制度と転向とは銅貨の裏表。どうしたらいいでしょうか。

私は日本で小学校までしか行っていないんです。なるべく私は東大教授と飯を食わないようにしているんだけど、その決心のもとになったのは、葬式でね、何かで飯を食っていたら、急に私に言うんですよ。「鶴見さん、東大教授の悪口ばかり言うのは、鶴見さんハーバード出てるからでしょ」って言うんだよ。

あ、ハーバードを上る学校だと思ってるんだ、つまり、アメリカの東大だと思ってる。上の学

校出ているから、東大教授を軽蔑してるんだ、そういう頭の構造になっちゃってるんだ。こりゃ、一緒に飯食うの消化に悪い、断じて、東大教授と一緒に飯を食わない。そう公言してるんですよ、いろんな所で。私は丸山真男（※東大教授）好きでね、丸山真男が生きているうちはそういうことを言わないように注意してたんだ。だけど、丸山さんもう死んじゃったから、もう平気なんだ。これからは、なるべく東大教授とは飯を食わない。飯がまずくなるし消化に悪い（笑）。

私は、大学で教えたことがあるんですよ。教えるようになって初めて、日本の大学の門に入ったんです。京大が振り出して五年、次に東京工大で六年、同志社で十年。全部で二十一年。その中でね、非常に率直に言つて、同志社で過ごした時間は、もっとも輝かしい時間なんです。

なぜかと言うと、この「交流の家」を作るという、非常に不思議な体験に関わったからです。ここで、ハンセン病快復者の家を作るってことは、さっきの一番二番とか、成績良くするってことと関係ないんですよ。自分の成績良くても何の役にも立たない。金儲けにも役に立たない。そういう運動なんです。学生運動としては珍しいですよ、これに出会ったのが一九六一年ですから、四十一年経つてるでしょ。今も集まりが続いている。普通学生運動は、だいたい入って三年も経てば、就職の問題があるから、三年交代なんです。

だけど、この運動は今も続いているんですよ。木村聖哉が中心になって、今、ハンセン病の快復者の生涯を芝居でやる、一人芝居の興行をやっているんですよ（※5頁に、講演の後で木村聖哉さんにしてもらった話を載せています）。これは昔の話で意味がないってことじゃないんですよ。いくらプロミン（※ハンセン病の特効薬）ができて治る

ようになったと言つても、からだの変形、顔の変形は治りませんから。長く隔離されたという、過去も消すことができないので、なかなか一般社会に受け入れられないんです。

そういう人を受け入れられるためにどうしたらいいかって言うと、一人芝居の運動やなんか、われわれの仕事を交える。からだは変形していても、もう、うつらないんですよ、はっきり言つて。手を握るってことを、私たちはする。顔が変形していても、相手の表情は見えるんですから、恐れることはない。ただ普通に「おはよう」「こんにちは」って言うそれだけの仕事をやれるということが今の日本を変えていくんです。これが、私に關する限り、いや、この運動に關する限り、一九六一年から今日まで、二〇〇二年まで、四十一年続いているんです。

日本の学生運動の歴史として、四十一年続くとするのは大変なことですよ。同志社大学にいた十年は、私にとつて、最も輝かしい年月なんです。大抵は、好きじゃないですけどね。それは先生本位で見ると、学生本位で見れば自ずから違います。

ハンセン病の少年との出会い

どういうふうにしてこの運動が起こったかということをお話ししましょう。

戦争が終わつてすぐの時、リトアニア人の医者から電話がかかってきたんです。「ハンセン病の子どもを発見した。だけど、自分は日本語が話せないから、県の医者に来てもらつて状況を説明しようと思うので、通訳に来てくれないか」って言う。私は行つたんです。そしたらね、少年が座つていて、膝が動かないんだ。ものすごい美男だったんだ。天使のような美少年だった。それで彼の言うこと、リトアニア人の医者の言うことを県から

来た役人と医者に説明したんです。これはハンセン病だと思うので手続きしましょう。草津の療養所があるからと。その時はそれで済んだんですよ。それからずいぶん経って、ハンセン病の患者の詩集を作っている大江満雄という詩人に会ったんです。彼が、その仕事に私を引っ張り込んで、ある時、草津の療養所に連れて行ったんですよ。その時、ふっと思い出してね、「ここに白系ロシア人の患者はいませんか」って聞くと、「いる」って言うんですよ。

私はそこに大江さんと一緒に行ったんだ。掘建て小屋があつてね、開けて入るとその中が全部、帝政ロシアなんだ。どうしてそういうことが起こるかっていうとね、『ライフ』っていうアメリカの兵隊が持っていた雑誌に『戦争と平和』っていう映画が載っていたんですよ。主演はオードリー・ヘップバーン。帝政ロシアのいろんな建物や踊りやなんかを、切り抜いて貼つてあるんですよ。イコン（※キリスト・聖人などの画像）も置いてある。驚いちゃってね。そこに少年——それはもう、ずいぶん年を取っていましたから、かつての天使のような美少年じゃないんですけども——それから、おばあさん（お母さんのお母さん）がいた。

八十歳なんだけれども、八十を超えて美しい人なんです。それもびっくりした。あとで聞くとね、この療養所に来る時に、そのおばあさんはハンセン病の菌出ていないんですよ。だけど、言葉の自由な白系ロシア人の少年だけを入れるのはあまりにかわいそうだから、おばあさんも一緒に入ると言った。おばあさんからも菌が出たって、療養所の所長も嘘をついてね、入れたんですよ。そして一つの掘建て小屋を作った。

私はその所長、偉いと思いますよ。日本のハン

セン病の政策っていうのは全体としてそうならなかつたんですよ。それを自分の判断でそうしたんです。それは、世界の情勢がすでにそうなっているということを知っていたからなんです。ハンセン病っていうのは伝染力低いんです。既にプロミンができているんだから、伝染しないようになっているんですよ。日本のハンセン病政策は遅れていたんですよ。彼は、医者としてそれを知っていてその処置を取ったんですよ。

おばあさんと話をしたらね、そのおばあさんは帝政ロシア時代の公爵の娘なんです。ロシアの貴族制度っていうのは公爵の娘はみんなプリンセスなんです。彼女はポーランドの伯爵と結婚しているんだから、そっちではカウンテスですよ。プリンセスでカウンテスなんです。子どもの時から演劇が好きで、いろんな貴族の中での演劇をやっていたんですよ。プーシキンの朗読が得意でね、われわれの前でプーシキンを読んでくれたんですよ。大変なものなんです。もう、大江満雄は感激してね、そのおばあさんを抱擁してるんだよね。

旦那さんのポーランドの伯爵が第一次世界大戦で戦死して、自分を慰めるため娘二人を連れて東洋に旅行に来て、満州まで来た時にロシア革命が起こり、持っている株券やなんか全部価値がなくなつたんです。彼女は非常に困って、若い時に演劇をやっていたことを思い出して、ちょうど満州に天勝一座が来ていたので、そこに乗り込んで行って、自分は演劇の経験があるから使ってくれないか、って言う。彼女は大変美しい人ですから、天勝は採つたわけです。それで、いろいろ前座やなんかに使った。そうして、天勝一座の一員として日本に来たんですよ。

かなり貧乏な暮らしなんです。やがて日本では松竹に拾われて、松竹の演劇研究所で教育係にな

る。そのころ大正の始めですから、どういふふうにして洋服を着るのか、どういふふうにして下着を着るのか、わからないんですよ。どういふふうにして洋食を食べるのか、どういふふうにして椅子に座って、どういふふうに歩いて、どういふふうにしてダンスをするのか、わからないですよ。それを全部教えて、全国から美貌の青年男女集めてきている門下生の中から、鈴木傳明などが出たって言うんですよ。

あんまり話が突飛なんでね、私は聴いておいて、帰ってきてから『日本映画発達史』という三巻本を調べてみたら、ちゃんとそのおばあさんの名前が出ていんですよ。本当だったんです。びっくりしたね。

そのうちに、赤露軍と白露軍の戦いがあつたんですよ。白露軍の勇士で、若い公爵が巡洋艦を乗っ取って長崎に入った事件があつて、彼とその娘が結婚して今の美少年が生まれたんですよ。まったく珍しい話ですが、当時の新聞に全部それが出ていて、裏書きされているんですよ。そのおばあさんは、この子の父親は非常に皇室に近い家柄なんです——ロシアつてのは広いからね、公爵つたつていろいろいるんですよ——この話は外に知られたくないって言うんですよ。だから、人に言わないわけ。だけど、偶然私は発病の時に立ち合つたからね、それから付き合いが生じて話してくれました。

プロミンの力で伝染力はなくなるけれど、彼はもう片足切っちゃって、不具になつてる。ある時に、バタバタ（※オートバイ）に乗って東京まで出てきて、泊まることを東京YMCAに決めたから、そこで何時に会いに来てくれと言ってます。

私は京都から出てきて、その時夜行で京都へ帰る途中だったんで、会いに行つた。すると、その青

年がフロントでやり取りしているんだ。フロントがね、「他の宿泊者に嫌な感じを与えるから、泊めることはできません」って言う。前に約束しているのですよ。

私が助っ人になって、「でも、約束したじゃないか」と言っても、「だめです」って言うんだよね。「ここはクリスチャンの館でしょう。Y M C Aなんだから。そんなことを言うなら、Y M AにしてCを取ってしまえ」って言ったんですよ。私のそのレトリックは効力がなかったんですね。そのうちに、彼自身が横浜の方に電話してね、アメリカ人がやっている簡易宿舎に今晚泊まれるようになったから大丈夫って言った。

生涯の輝かしい時間



講演会后、大倭会館で懇親会。鶴見俊輔さんを囲んで。左端が木村聖哉さん。

夜行で帰ってきてね、憤懣やるかたなく、私は

同志社のゼミの学生にその話をしたんだよ。憤慨するくらいのことは、進歩的知識人なら誰でもやりますよ。ところが、数日経ってね、そのゼミの一人がやってきてね、「そういう人たちを泊める宿を作りましょう」って言うんだよ。

「もう土地を見つけてきました。貸してくれます」と。それがこのもとなんですよ。

驚いたねえ。というのは、ゼミの学生って、二十歳やそこらですよ（※故柴地則之さん）。それが、そういうふうな信頼されるってことが、私らびつくりした。その人間そのものが非凡な人間だったんですよ。だから、そういう学生の出たところってというのは、私にとつて、教えたことのある大学の中でも、最も忘れられない場所であつて、同志社にいた十年は輝く年月ですね。現にその運動は、今も続いているんだから。日本国民の大多数が依然として受け入れていない、快復者を受け入れる運動を。

九十年間の強制隔離は絶たれた。私はあの日、小泉首相のテレビを見ていましたよ。始めは会わないうつて言っていたのに、会うつて言つて、患者代表が来た時に、はっきり目を見た。その時目が揺るぎがなかった。これは難しいところなんです。初めて目を合わせた時に、ちよつとこう、横を見たりするんです。それから、手を伸ばして、手を握つたんです。この時全く躊躇がなかった。ああ、小泉さんであれば本格的な右翼だなあと思つた。右翼はそのぐらいでなきゃチンプラですよ。私は小泉さんに感心しました。

九十年間の法律は絶たれたんです。だけど、民衆の習慣はすぐには変わるといふわけにはいかなんですよ。今だつて大変だと思ふ。「親戚が引き取ればよい」なんて言つたつて、そういうふうな親戚が変わるわけではないんだ。しかし、親戚でも何でもないわれわれが、普通に手を握り、普通に一緒に飯を食ひ、「おはよう」とか「さよなら」とか挨拶しているのが、それが、結局は一億人を変えていくんじゃないですか。その「場」としてここが始まつたんです。まだ強制隔離が続いてい

る時に、ここが始まつたんです。法律に反する行為として学生が始めた。私は、学生運動はリンチ事件とかいろいろあるけれども、そんなものに比べて、この学生運動は偉大な学生運動だつたと思ひます。

あと、驚いたのはね、この学生はね、知恵があるんですよ。この法主さんは、一諾千金でこれを使つて言つてくれたわけ。だけど、作つていううちに周辺の人たちが反対運動が起つて、囲まれたことがあるんですよ。その時にそこで乱闘をやつたらもう全部つぶれますよ。ところが、学生の方は「皆さんの承諾を得るまでは私たちがこの交流の家をつくりません」と言つて、皆の見える前でかなり積み上がったブロックを壊しちゃつたんですよ。

すごいと思うね。それまでの学生運動というのは押せ押せでね、引き足がないんですよ。これは、明らかに引き足がある。それで、諦めるかといふとそうじゃないんですよ。夏ごとに男女で組になつて、その反対している人の家まで行つた。西占貢という京大の医学部の教授も応援してくれて、プロミンができてからはもう伝染しないんだという証明を書いてくれたんですよ。それを持つて行つて、もう伝染しないんですよ、幾夏かやつたんですよ。

そのうちに、だんだん、だんだん、反対する方も別にある信念を持つて反対しているわけじゃないんで、何となくああそうですかとなつてきたら、バツと家を建てちゃつたんだ。だから、やつぱりその決断力は、すごいなあと思ふね。知恵があるんですよ。知恵と決断。普通の学生運動と比べてみて、考えられないでしょ。そういう偉大な若い人たちがいたし、今もいるんですよ。私の八十年の生涯の中の輝かしい時間ですね。

(続く)

一人芝居

『地面の底がぬけたんです』

公演運動について

今日は木村聖哉さんが来ておられるので、ちよつとお話をさせて頂きたいと思います。木村さんは鶴見俊輔さんと共著で『むすびの家物語』（岩波書店）を書かれた方でもあります。

木村聖哉 この一人芝居は、藤本としさんという方の『地面の底がぬけたんです』という原作を舞台化したものなんです。きっかけは、私の知り合いで結純子さんという、一人芝居をやっている人がいまして、この人の芝居は良いなあと思っただんです。その結純子さんから、「何か一人芝居に良い題材はありませんか」と言われた時、ひよつと思いついたのが、これだったんです。

「交流の家」の管理人だった飯河梨貴（故人）さんが、藤本としさんの随筆集を出版したいと言って、東京で本当に一生懸命あちこちの出版社をあたったんですが全部断られる。で、思想の科学社にいた那須正尚（故人）さんに相談した。彼は同志社大学で私の一年先輩で鶴見先生の第一期のゼミの生徒なんです。ワークキャンプもやってました。彼が思想の科学社の編集会議で提案して、随筆に、藤本としさんの聞き書きを加えて一冊の本にするという条件で出すということになりました。

那須さんは、邑久光明園へ行き一週間くらい泊り込んで藤本さんの聞き書きをしたんです。それがすばらしいんです。結さんもこの本を読んで、これをもとにして一人芝居をやるかもしれないと言っただけなんです。それが三年ぐらい前でしたかね。

鶴見先生にも話したら、「それはいいねえ」と

言われたんで、ヨシつと思っただんですが、モタモタしてる間に二年ほど経った。やっと稽古に入ってた。翌月、熊本地裁の判決（※らい予防法は不当であったとして国の賠償責任を認めた）が出て、小泉首相の決断で国は控訴しないということになりました。

今やらなければ時機を失する、やるんなら先ずFIWC関西委員会だと思っで手紙を書きました。それから京都の論楽社、キャンパーだった鳥取の徳永進さんにも手紙を書いて協力をお願いしました。みんなO・Kになったのが八月で、もう十月に公演したんです。しゃかりきになって取り組んで頂きました。ちょうど判決の後だったんで、マスコミ各社が本場に好意的でした。FIWCは、大阪の未生流中山文甫会館を借りて、急ごしらえの舞台で、椅子を百三、四十並べてやったのですが、百八十人も来て超満員なんです。

この三力所の後には、何の予定も無かったのですが、色んなところから問い合わせがありました。現在までに二十三力所で行いました。今月は四国、九州、来月は宇治、伊丹、大阪などでやって今年中には三十回になるんです。特に教育委員会とか差別問題に関心の強い自治体からの問い合わせが多いんです。どこも主催者がやってよかったですと感動してくれるんですね。見に来てくれた人のアンケートでも好評ですし、本当に一年前にはこういうことができるとは予想もしませんでした。

僕と同期の柴地則之君は、「交流の家」を作る時は先頭を走ってがんばり、一番先に亡くなりました。僕は「交流の家」の時は、ちょうど大学を出た後だったし、直接はタッチしてないんです。けれども一番後ろから歩く人間としては、こういう形で、この芝居を通して彼の精神を生かしていきたいと思っってます。

沖縄ミロク会来訪

平成15年5月2～5日

沖縄から神業に

本紙の昨年九月号の「寸紗」で紹介した、「自然の摂理や神意に心から従って」平和を祈る「神業」を行っている「沖縄ミロク会」の巫女さんたちのことを覚えておられるだろうか。

その方たちが、五月のゴールデンウィークの四日間、一昨年の大倭会文化講演会の講師でもあった野本三吉さん一家三人も加えて、総勢十六人（内一人は北海道から）で大倭に滞在された。そして、大倭神宮に参拝されたり、大倭の有志の案内で奥吉野の玉置神社や平群谷の石床神社や御櫛神社を訪れ、独自の「神業」を行った。特に、玉置神社行きは、ミロク会の人たちにとって特別な深い意味があつたようで、高齢の巫女さんたちが険しい山道を一心に登る姿には感動させられた。

五月四日にはこのミロク会と大倭の人たちとの交流夕食会が行われ、大本教の出口三平さんや水俣の高倉親子や静岡の野草社の石垣夫妻等たくさんの方がたも参加してくれて、多色彩一休の和やかな雰囲気だった。（写真は五月五日に沖縄に向けて出発する日の大倭神宮を参拝した時のもの）

岸田哲記



大倭会第273回文化行事報告

桓武天皇陵・明治天皇陵へ

平成15年3月20日

日常的な顕幽不二

舞鶴市 藤本 宏 秋

雨の中、午前十時四十分、桃山御陵前駅・改札口集合。総勢25名（都合で遅れて到着組を加え最終参加者、大人34名、小人2名）で桓武天皇陵へ。雨があがっていたが、念のため傘は持ち、霞みがかつた境内を歩く。正面で思い思いに参拝。しばらくすると、幻想的だった霧が、ほんの瞬間だけだが、スカッと消える。湯浅芳郎さんの御陵に関する説明を聞く。ひとしきり終わると、杉本順一さんに向かってニコニコしながら、「電話はつながりましたか？」と話をふる。どうやら、「霊界通信はできましたか？」という意味のよう。日常会話の延長のようで面白く思う。杉本さんの話によると、朝出発前、天皇に関する事を考えていると、「テンノウケモ ヒトノニコニオナジ ヒトノニコニクベツナシ」という法主さんの念を、また、霧が晴れた瞬間には「ネガイ カナエラレタ」という桓武天皇の念を受信(?)されたようだ。自然現象と同時に念が届いていることに、相關関係の不思議を思う。また、同じ時代のアテルイさんやモレさん（詳しくは先月号）にも想いを巡らせていたのだが、約千二百年前の相対した両方に、ほとんど同じ時期にお訪ねしていることも不思議に思った。湯浅さんの「桓武（かんむ）天皇も感無（かんむ）量とのことで……」の言葉に、一同、吉本新喜劇ばりのずっこけをしながらも、その場にと和やかな気が満ち満ちた。

その後、ワイワイガヤガヤ、ゆっくり歩いて、

明治天皇陵へ。ここでは、現界と霊界の心の交流は、人と人との付き合いと同じように、お互い様の関係になっていて、気づかされた。まるで鏡のように、お互いに近づいただけ、心の距離感も近づくのかもしれない。そんなことを考えながらも、前日二年祭だった鈴月かあさんの「障らぬ神に祟りなしやでえ」との口癖も頭の中を巡るのだった。

その後、明治天皇后・昭憲皇太后の御陵を参拝。しだれ桜が一本あり、風にゆられて美しく咲いていた。続いて、明治天皇がご逝去された時に殉死されたという、乃木希典を祭る乃木神社へ。思い思いに境内を巡っていると、突然、どしゃ降りの雨。それまで傘もささずに歩けたことに、あらためて感謝できた瞬間だった。

御香宮神社へ移動。絵馬堂でシートを敷き、それぞれに持参した弁当で和気藹々と昼食。午後一時半頃、文化行事としては解散となった。

その後、17名は、ひよんな流れで、京都東山にある耳塚へ行くことになるのだが……。

ちはやぶる神のひらきし道をまた
ひらくは人のちからなりけり(明治天皇御歌)

耳塚へ

京都市下京区 三宅 淳 之

法主の言葉に「先祖さんを浮かばせるといふことは先祖さんを喜ばせるといふことなんですね」「義理からやつかいみたいなのに、ああ今日は命日だから坊さんをお呼びしたい」といふと、今日は「お水でもお茶でも供えんならん、今日はその日やから菓子でも供えようかと」と、まるで自分たちと切り離れた別の人のとこへ、ひとつの伝統的な習慣によつてやっつけているようなことでは、決して霊の世界においての生活、姿なき人間が集まると



おる自分たちの先祖さんのグルーブの生活というのはいかにうまいかないんです。肉体を持つている人と

持たん人と、しよつちゆう結びつきがなかったら霊の世界も現界の人たちも幸せな生活はできないんです」という言葉があります。

この言葉を今回ほど重く、深く考えさせられたことはありません。

というのも以前祓会で、京都東山にある耳塚の話をした時に、生前のカアさんに「昇ちゃん(※聾啞)をそこへつれていってくれへん？」と頼まっていたのを思い出して、大倭のホームページに書き入れたところ、今回の大倭会文化行事の後に有志の方々と参拝することになったからです。

「耳塚」とは、豊臣秀吉が朝鮮半島を侵略した文祿慶長の役の折、手柄の証明のため朝鮮軍民男女の耳や鼻をそぎ、塩漬けにして持ち帰ったものを秀吉の命によりこの地に埋められ供養が営まれたのが始まりのようです。

このような行為を受けた方々に、「慰霊」という言葉を使うにはためらいがありますが、参加された皆さんの真摯な祈りを見て、また耳塚のそばで生活し、管理をなさっている方のお話を聞くことができて救われる思いをしました。

カアさんをはじめ、今回の参拝の下準備を下さった方々、参拝をして下さった方々に感謝をいたしております。奈母太加天腹 顕幽不二 還元帰一 太加天腹 拍手合掌

こもれる魂魄の地をたずねて(十四)

「だんごつり、いへん、いへん」の物語

青森県弘前市 石田 勝利

津軽で生まれ、津軽で育った自分に、それ以外に何の疑いも持たなかった。が、ある一人の人物を調べ上げているうちに、とんでもない歴史的人物が鮮明に浮かび上がってきた。その足跡をダイジェストに語ります。

青森県には、真言宗、弘法大師二十三ヶ寺霊場巡り」があります。その第十四番札所「大峯山 蓮正院」が、私の本家です。昔から「ホウゲンサマ(法印様)」と呼ばれ、四年に一度の「火性三昧」の行事は、観客数百人を集める一大イベントです。初代観性法印から数えて、私が十八代になります。初代は吉野から来た、大峯山で修行していたらしいこと以外、詳しい事は分かりませんでした。ところが、古文書や弘前城、津軽藩主について調べていると、「関ヶ原の合戦」という事件を境に、チラホラとその名が出現して来るのです。

西暦一六〇〇年、徳川家康と石田三成との合戦の軍配が家康に上がったその時の事。

大阪城では、三成の佐和山城(近江長浜) 陥落の知らせを受けた北政所(豊臣秀吉の正室)が、ある男を呼び出した。北政所は三成の次男源吾とその妹辰子を預かっていた。呼び出された男は、乳母の父親の大教院貞安である。

北政所は辰子を養女として庇護することにするが、十二歳の源吾は亡命させざるをえない。津軽藩初代津軽為信の長男信建はかねて三成より手厚くされていた。その彼を源吾の安住を保障できる人物と見込み、亡命先に津軽を選び求めた。

が、その地へ辿り着くまでが困難。大教院貞安は、一行十七名を山伏姿にして日本海側を北上し、

津軽の地へ落ち延びた(途中、能登の国で前田利家公より石動山不動院の本尊、脇差、大聖寺梅鉢の家紋を拝領している)。残党狩りに備え、貞安は石田姓を、源吾は杉山姓を名乗る。

その後の運命は奇なるものです。

津軽信建は石田方であったが、その弟信枚は徳川方に組して数年後に二代目藩主となる。そして一人の側室に三代目藩主信義を産ませた。その側室こそ北政所養女の辰子であり、津軽藩主は石田三成の血をひくことになった。また源吾は家老の座に迎えられる、以後二七〇年間その座を保つ。

大教院貞安は一寺を構え、観性法印と称する。愛宕神社別当、大峯修験中興の祖として相当重きをおかれたと伝えられる、この人物が私の本家の初代なのです。ここまでが物語の第一部です。

*

物語の第二部では、関ヶ原の合戦という事件を二百年ほど遡ってみましょう。時代は鎌倉末期、足利尊氏の謀反によつて、後醍醐天皇は吉野へと移った。南北朝の対立が始まる。南北朝は後村上、長慶、後龜山と四代にわたった。

長慶天皇は、在位十六年で弟の後龜山天皇に位を譲り、南朝再興を図るべく南朝方の公家、武家を訪ねて、太平洋側を北上する。足利の追っ手を逃れながら高野山、伊勢、仙台、そして青森県の南部まで来る。が、北朝方だったため、津軽の浪岡の北畠氏へと逃れた。そこは当時東北最大の吉野修験の拠点、津軽三千坊の一ヶ所である高野千坊の地であった。そこから岩木山寄りの所(弘前市相馬村)の、新田氏が築いた紙漉館に迎え入れ

られた。十八年後、この地で崩御された。

一方、第九十九代南朝最後の天皇、後龜山は七年の後、將軍足利義満が提示した条件に同意して後小松天皇に譲位して南北朝の合一が成った。しかし条件は守られず、無念の死を遂げた。兄長慶の死の二十一年後であった。

しかし血脈は続いていた。長慶の長女梅子と後龜山の長男廣成親王が結ばれて、良仁王をはじめ六人の子を得た。良仁王は吉野の吉水院で落飾(仏門に入る)、観修寺座主の時、五十三歳で没したが、四人の子がいた。その長男照良王の母は、北畠大納言満雅の娘、初音姫である。

照良王は大峯山で修行して、京都伏見の修験者を統括する醍醐寺に、大教院貞安の名で迎え入れられたのである。

醍醐寺には太閤秀吉の積極的な支援があった。一五九八年春、秀吉が豊臣一族、諸大名を従えた、いわゆる「醍醐の花見」がその頂点である。大教院貞安の娘は、大阪城の石田三成の子の乳母として出仕を許された。

南北朝の争いから戦国時代へと二百年にわたる世を、南朝の血を絶やさず生きのびてきた今、貞安はやつと安堵の気持でいっばいであった。しかし花見の宴の後、秀吉が六十三歳でこの世を去ってしまうと、国を二分する戦さになった。

それでも貞安は太閤秀吉の築き上げた平和が続くと確信していた。石田三成の勝ち戦さの朗報を、今や遅しと待っているのだ。

表紙(貞安のウツ)

黄金色に輝く菜の花畑に浮かび立つのが、津軽富士の異名を持つ岩木山です。すぐ後ろには浪岡城跡があります(中世に栄えた南朝の公家、北畠氏の居城)。六百年前、第九十八代長慶天皇がこの地に逃れた時、彼の岩木山を眺めていたのです。

あじさい日誌

4月13日 禊会。東大阪市の中村宜睦さん（気の合う仲間との村づくりのような夢をお持ちのこと）等、初参加者3人。

4月15日 大倭神宮にて箭負祭が行われました。青山日元さんから、昔の箭負祭では法華経の寿量品を3回唱えておられた話などを聞きました。

4月17日 古武術家の甲野善紀さんが大出真理子さんと邑に立ち寄られました。このあと関西のアメフト選手達に講演に行く途中とのことでした。

4月19日 午前11時より奈良パークホテルで邑交會。菅原園の宮田幸則新園長が初参加されました。

故矢追鈴月かあさんの丸二年の命日のこの日、大倭会館で有志の皆さんがお参りと昼食会を

田んぼ通信

田植えのご案内

今年も田植えの季節となりました。無農薬、EM農法で米づくりして6年目の春です。どうぞふるってご参加下さい。

6月7日(日) 午前9:00~(雨天決行)

※泥で汚れてもいい服装で。
(着替え、タオルは各自で準備)
軍手・軍足は用意します。
※昼食・飲み物は用意します。(持込み歓迎)

連絡先

TEL 0742-41-4615 (双葉館)

4月20日 桓武天皇陵・明治天皇陵への文化行事報告は6頁ですが、珍しい参加者がありました。菊地洋一さんの紹介で来たというメキシコの学生シヤンティ・ロドリゲス君はインターネットで見た、ある農業支援のプログラムで来日。双葉館のお世話でユースホステルなどに泊まりながら奈良・京都を観光後、広島へ行



しました。その後、矢追房子さんの『悠・幽』出版を祝う会が開かれた奈良ロイヤルホテルへ移動。
午後2時半からの出版を祝う会には96人が出席という盛況でした。

つてから帰国の予定とのこと。熊本県蘇陽町の楠林衛さんは京都での催しに参加のため交流の家に宿泊中だったので、ついでに参加とのこと。東京都町田市の得田典子さんと二人の娘さん。金昇允さんは、桓武天皇のお母さんが百済の帰化人出身だったから参加したのかと思つたら、「全然知らなかった。珍しい仕事がなく、ふとその気になった」という。

4月23日 大倭大宮月次祭。
4月25日 29日 交流の家でF1WCがワークキャンプ。
4月27日 大倭町自治会副会長の須川映治さん一家が近くの六条緑町に引越ししました。
4月27日 29日 杉本順一さん等6人は、それぞれ現地で5人の皆さんと合流しつつ、神奈川県真鶴の三ツ石、群馬県安中市の中村さん宅、(中村さん関係4人)を加え、長野県諏訪方面に鎮魂霊の旅をしました。
4月30日 5月1日 大倭病院の看護師、山本昇子さんの夫、正史さん(享年72歳)の前夜祭、帰幽祭が、大倭会館で矢追家麻呂教長さんを祭主として執り行われました。
5月2日 5日 沖縄ミロク会の皆さんが来邑。記事5頁参照。
5月6日 大倭神宮月次祭。
大倭安宿苑では
5月10日 午前10時半より社会福祉法人大倭安宿苑成立47周年

第275回 大倭会文化行事 大阪東洋陶磁美術館と 水上バス遊覧

天目茶碗などの名品を鑑賞し、その後、水上バスで川面から大阪を遊覧する。

日時 平成15年6月22日(日) 注意!
第4日曜日 午前10時30分集合
場所 東洋陶磁美術館入り口
(大阪市中之島)
交通 大阪地下鉄御堂筋線または京阪・淀屋橋駅下車10分
コース 美術館見学→昼食→水上バスによる遊覧(淀屋橋発で約1時間)
費用 約2,000円(入館料、水上バス代)
弁当持参 雨天決行

屋食場所は林修三さんの「現代中国語センター・有朋塾」にお邪魔します。
世話役 湯浅芳郎 ☎0742-48-3389

記念式典が開催されました。式典に先立ち、安宿苑の守護霊成謙坊大善神さんへご挨拶。式典後は来賓を迎えた祝賀会場・4施設とも揃ってパーティのご馳走を楽しみました。
(菅原園)
5月2日 午後、端午の節句行事。みんなでよもぎを採つてお餅をつき、食べました!
(須加宮寮)
4月27日 心身障害者スポーツ大会(卓球)に4人が出場、メダル3個を獲得しました。
(長曾根寮)
4月23日 岡本幸野さんが、奈良市の南田助役・山中保健福祉部長・住苑者の皆さんに百歳のお祝いをしてもらいました。
(八重垣園)
4月30日 俳句の会。「花吹雪絨毯となり池の面」「セールの多弁に釣らる四月馬鹿」「野の花を握る幼児や春の風」

*月次祭(大倭神宮)
6月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。
*大倭会主催第一一五回祝会
6月8日(日) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。
祝(みそぎ)とは、自己本霊を覆っている枉罪を祓い加美のお徳を戴くこと。「つみそぎ」と「みいずそぎ」という言葉が一体となつてきた大和言葉。禊には、知恵の研鑽によつて表面から枉罪を除く方法と本心、本霊の働きによつて内側から除く方法とがある。
*月次祭(大倭神宮)
6月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。
*月次祭(大本宮)
6月23日(月) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

あんない